

隋唐期における墓誌史料の 研究基盤情報の統計分析

福島 恵

はじめに

本稿は、科学研究費補助金 若手研究（B）「隋唐期における墓誌史料の研究基盤情報の整理と分析」（2010～2015 年度）による分析結果である。中国隋唐時代、死者の功績とその血統などを数百字の漢文として、それを石材に刻み、死者とともに埋葬した墓誌は、現在、当該時代の研究には不可欠な史料である。ただし、墓誌は、たった 1 件でもその豊富な内容から研究価値を有すること、そして墓誌の件数が膨大であることから、数量的な統計分析が立ち遅れ、これまで史料の基礎的性格は不明瞭なままであった。そこで本研究では、墓誌史料を数量的に扱い、墓誌史料の研究基盤となる情報（出土地・埋葬年月日・墓誌のサイズなど）の整理とその傾向分析を行い、史料の基礎的性格を明らかにすることを目的とした。

以上の目的の下、本研究では、『隋唐五代墓誌彙編』全 30 冊（陳長安 等主編、天津古籍出版社、2009 年）と『隋代墓誌銘彙考』全 6 冊（王其禕・周曉薇編著、線装書局、2007 年）を利用した。前者は、隋唐五代期を通じた墓誌拓本集成として、後者は、隋代のみの墓誌拓本集成としてそれぞれ最も掲載数が多いものである。研究基盤情報の整理と分析は次の手順で行った。

①墓誌の研究の基盤となるデータを表計算ソフトに入力してデータベース化する。

②データベースの各項目について、表計算ソフトを利用して統計分析を実施する。

①のデータベースの一覧表は、情報量が膨大で掲載しきれないため、本稿では②の統計分析の結果のみを掲載した。

なお、『隋唐五代墓誌彙編』・『隋代墓誌銘彙考』には墓誌以外にも、「塔銘」・「墓表」・「墓碑」などが含まれるため、ここでは「墓誌」に限定して統計分析を行うことにした（サンプル数などの詳細は、以下の各項で述べる）。

最後に、①では高橋優作氏・作並湖乃美氏・丸亀裕司氏に、②では日高修甫氏にご協力・

ご助言をいただいたので、この場を借りて感謝の意を表したい。ただし、本稿の一切の責任は筆者が負うものである。また、筆者は、統計学に不慣れであるため、不適切な表現が見られるかと思われる。この点については、ご寛恕いただきご叱正を賜りたい。

1. 『隋唐五代墓誌彙編』

『隋唐五代墓誌彙編』（全30冊）から得られた墓誌のサンプル数は、4785件である。この件数は『隋唐五代墓誌彙編』には墓誌以外にも墓に関する石刻史料が掲載されるので、以下の操作を行ったものである。まず、「墓誌」と墓誌と性質は同じものの名称が異なっているとみられる「墓誌石」・「墓記」・「墳記」・「墓銘」・「銘」を分析対象とした。各件数は以下のとおりである。

墓誌：4641件 墓誌石：134件 墓記：4件 墳記：2件 墓銘：3件 銘：1件

さらに、『隋唐五代墓誌彙編』に掲載される以下の史料は本稿では分析の対象から除いた。

荼毗遺記・歿後記・鎮墓符命刻石・墓誌蓋・葬誌銘・石室誌銘・鎮墓石記・地券・

玄堂記・玄堂誌・神道誌・墓版文・鎮墓文・墓表^[1]・墓碣・墓碑・葬碑・柩記・

殯記・殯誌・石表・塔銘・浮図銘

ただし、『隋唐五代墓誌彙編』には、巻を跨いで重複して掲載される墓誌があることが知られるが、墓誌の内容を検討して同一か否かの判断が必要となるため、今回はその重複を排除する作業は行わなかった。

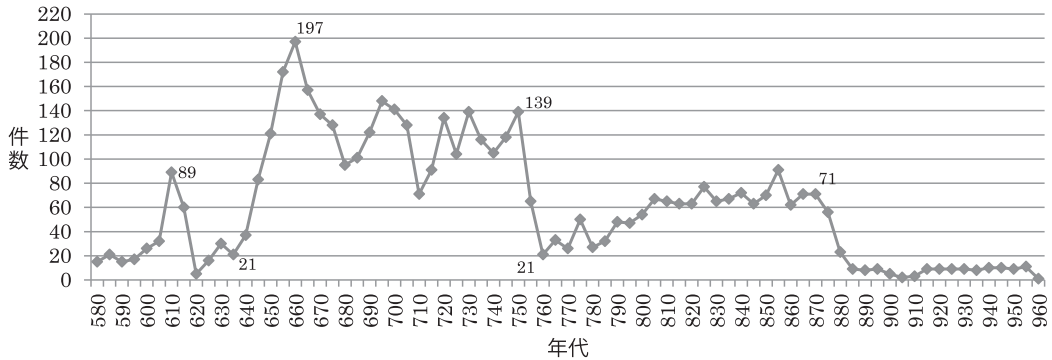
墓誌蓋のサンプル数は、全部で1575件である。これは、墓誌として分析したもので、蓋の情報が掲載されているものに、上述で対象外とした「墓誌蓋」の情報を加えた件数である。

なお、以下の『隋唐五代墓誌彙編』に関する各グラフや文末の注釈中での「年代^[2]」の表記は、5年区切りとし、その中でも最も早い年を表記することにする（例：840～844年＝840年、845～849年＝845年）。このようにすると、『隋唐五代墓誌彙編』が収録する墓誌の年代の上限は580年（＝580～584年）、下限は960年（＝960～964年）であった^[3]。

(1) 墓誌の年代

図表1-1に見える墓誌の件数の変化を歴史事項と照らし合わせて見れば、以下の通りとなろう。墓誌の件数は、隋の統一（589年）以降、特に煬帝の即位（604年）以降に増加し、隋末唐初の混乱期（616年頃～）に一時減少するものの、唐の建国（618年）と統一（628年）以後に再び増加し、660年（＝660～664年）にピークを迎え、その後多い状態を維持するものの、安史の乱（755～763年）で急激に減少した。その後徐々に回復するものの、黄

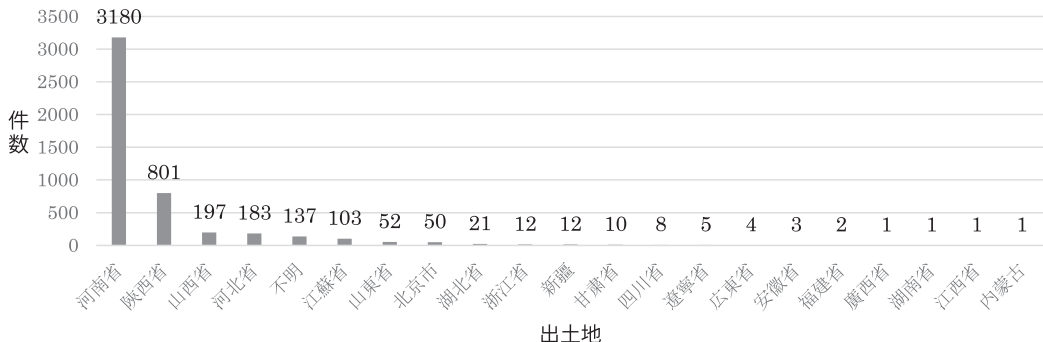
巢の乱（875～884年）で再度減少し、その後、唐の崩壊～五代期には低調となった。以上より、墓誌の件数は王朝の成立や崩壊、大規模反乱など、国内の情勢に多大な影響を受けていると言える。



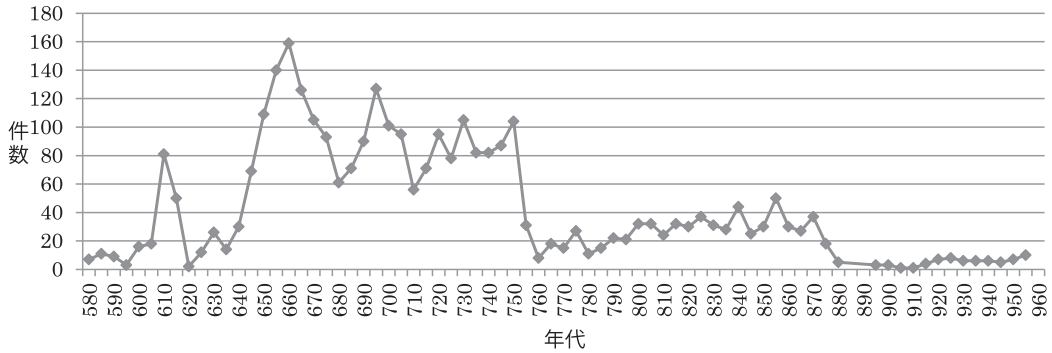
図表 1-1 年代ごとの墓誌の件数^[4]

(2) 墓誌の出土地

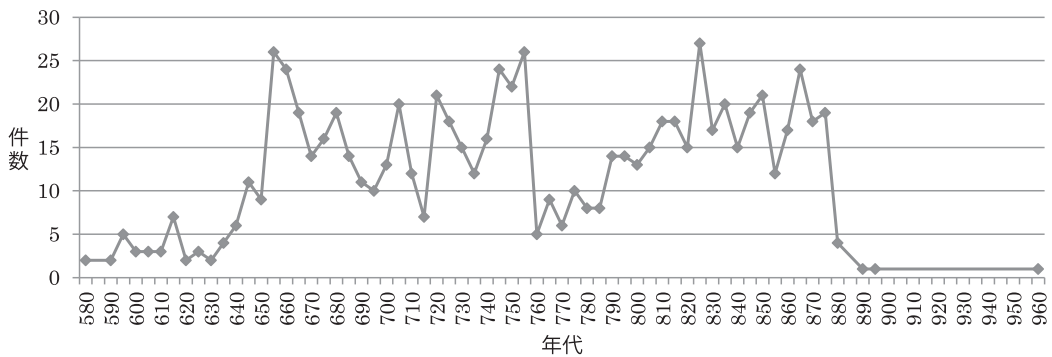
図表 1-2 からは、河南省から出土したものが圧倒的に多いことが分かる。つまり、上述した図表 1-1 はこの河南省の件数（図表 1-3）が大きく影響していることが分かる。また、出土件数第2位の陝西省（図表 1-4）は、河南省（図表 1-3）とほぼ同様のグラフを描き、唐王朝の重大事件に墓誌の作成件数が連動していることが分かるものの、全体的に見ればその増減の振れ幅は洛陽ほどではない。また、図表 1-5 の増減を見れば、サンプル数が少ないという問題もあるものの、特に河北・北京は、唐の後半期にかけて件数がむしろ伸びていることが分かる。これは藩鎮体制という政治情勢によるものであると推測される。



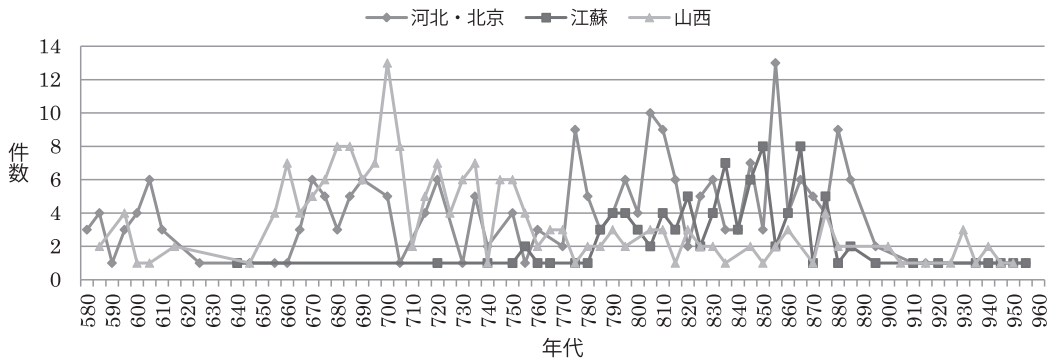
図表 1-2 出土地ごとの件数



図表 1-3 河南省の件数^[5]



図表 1-4 陝西省の件数^[6]



図表 1-5 その他上位3省の件数^[7]

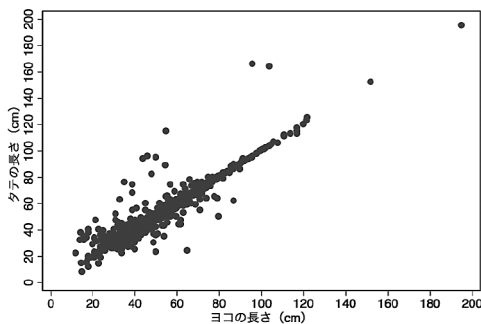
(3) 墓誌・墓誌蓋のサイズ

図表 1-6 の平均値・最頻値を見れば、墓誌と墓誌蓋とのタテ・ヨコはそれぞれほぼ同値であることが分かる。墓誌と墓誌蓋の最頻値を比べると、墓誌は墓誌蓋に比べて1~2 cm 大きい、その差は僅かであるので、墓誌・墓誌蓋の大きさはほぼ揃っていると言えよう。なお、墓誌の最大は「何弘敬墓誌」（865年死亡：河北巻 p. 123）で、彼は藩鎮でも特に勢力の大きかった魏博節度使であった。

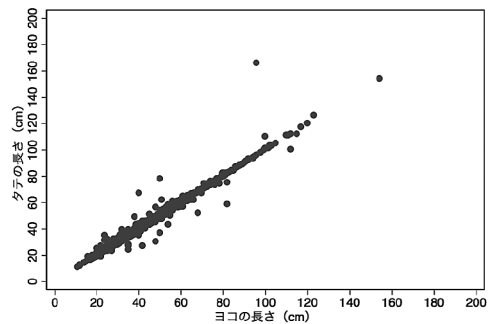
図表 1-7 と図表 1-8 から、墓誌と墓誌蓋のタテとヨコの長さには相関関係にあることが分かり、ほぼ正方形だと言える。各省の散布図（図表 1-9～14）は、墓誌の件数が劇的に変化した 760 年（=760～764 年）を境にその前と以後で点の濃淡を変化させたものである。河南省は、どの年代でもほぼ同じサイズの墓誌を作成していたことが分かるが、陝西省は 760 年より前の方がより大きな墓誌を作成していたことが読み取れる。これらの墓誌は、皇帝の一族の墓誌や昭陵や乾陵といった皇帝陵に陪葬された者の墓誌で、彼らの墓が唐王朝の都長安（現在の陝西省西安市）の側近くに造営されたためであると考えられ、地域的特色が見られる。また、タテ・ヨコが 120 cm を超えるものは、河南・陝西以外の省で 760 年以降に作成されたことが分かる。

図表 1-6 墓誌・墓誌蓋のサイズ

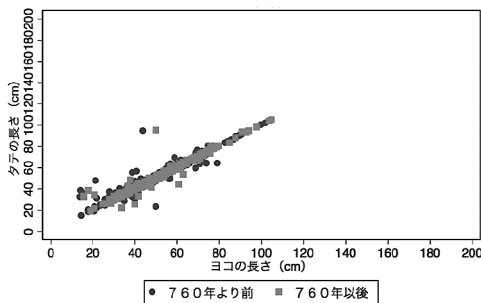
	標本数	平均値	最大値	最小値	標準偏差	最頻値
墓誌 タテの長さ (cm)	4776	48.117	195	8	13.326	45
墓誌 ヨコの長さ (cm)	4774	47.935	195	12	13.101	45
墓誌 面積 (cm ²)	4773	2476.229	38025	120	1589.608	2025
蓋 タテの長さ (cm)	1568	44.622	166	11	17.242	44
蓋 ヨコの長さ (cm)	1569	44.534	154.2	11	17.037	43
蓋 面積 (cm ²)	1541	2280.961	23715.96	121	1965.607	1936



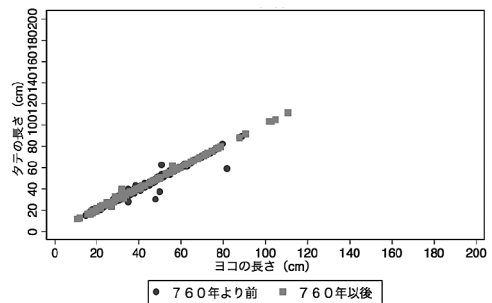
図表 1-7 墓誌のサイズの散布図



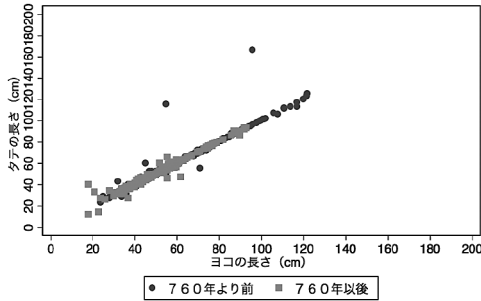
図表 1-8 蓋のサイズの散布図



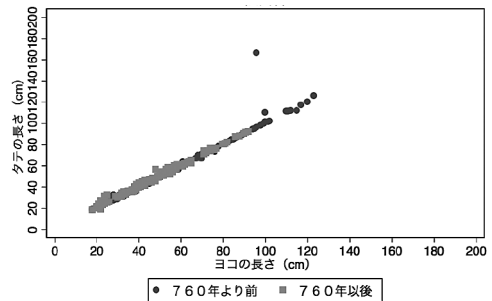
図表 1-9 墓誌のサイズの散布図（河南省）



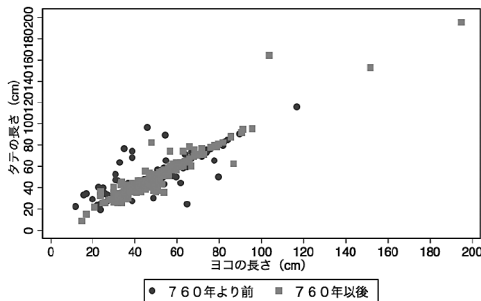
図表 1-10 蓋のサイズの散布図（河南省）



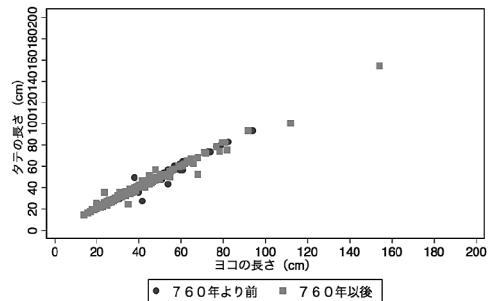
図表 1-11 墓誌のサイズの散布図（陝西省）



図表 1-12 蓋のサイズの散布図（陝西省）



図表 1-13 墓誌のサイズの散布図（その他の省）



図表 1-14 蓋のサイズの散布図（その他の省）

図表 1-15 拓片と誌石の t 検定

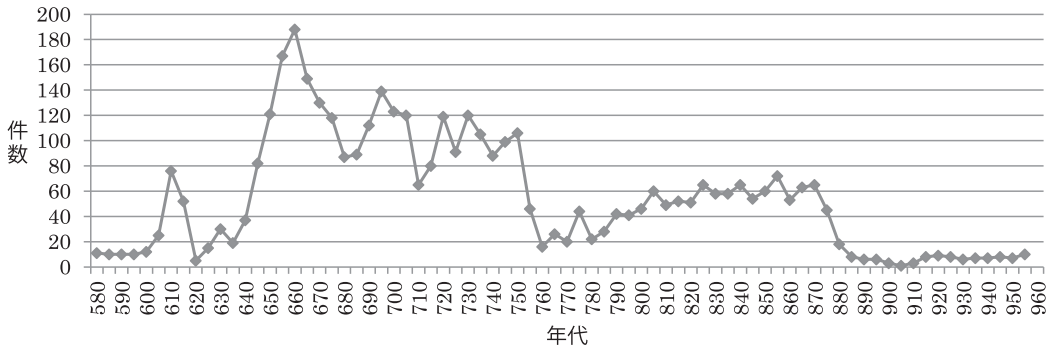
		拓片		誌石		t 検定
		標本数	平均値	標本数	平均値	
墓誌	タテの長さ (cm)	2030	47.52985	2725	48.53251	*
墓誌	ヨコの長さ (cm)	2030	47.36148	2724	48.38403	**
墓誌	面積 (cm ²)	2029	2446.492	2724	2498.701	n.s.
蓋	タテの長さ (cm)	508	44.82382	787	46.59873	n.s.
蓋	ヨコの長さ (cm)	511	44.69648	788	46.65292	*
蓋	面積 (cm ²)	511	2334.987	787	2465.979	n.s.

n.s.: 非有意, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$

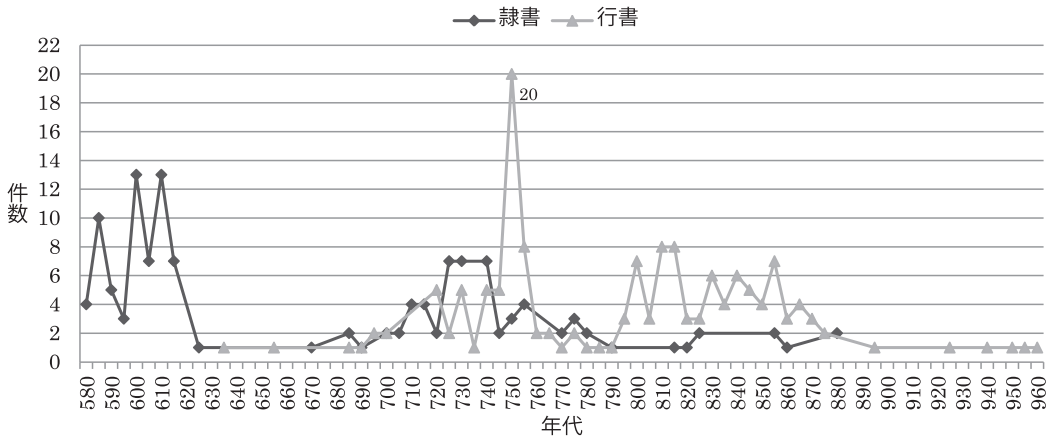
なお、『隋唐五代墓誌彙編』に記載される墓誌のサイズは、「拓片（拓本）」と「誌石（石のそのもの）」との区別があり、その2者に差があるのかを調べた。その結果が図表 1-15 で、各平均値をみれば拓片が誌石よりも1 cm 程度小さく、特に墓誌のタテ・ヨコ及び蓋のヨコの長さの差は統計上で有意であると認められる。これは、拓片（湿拓）は紙を湿らせて採取するが、採取時点では誌石と同じサイズであっても、その後に採取した紙が乾燥すると多少縮むためであると考えられる。ただし、この収縮幅は紙質にも左右されるはずなので、各々の拓本で一様でないとみられる。

(4) 書体

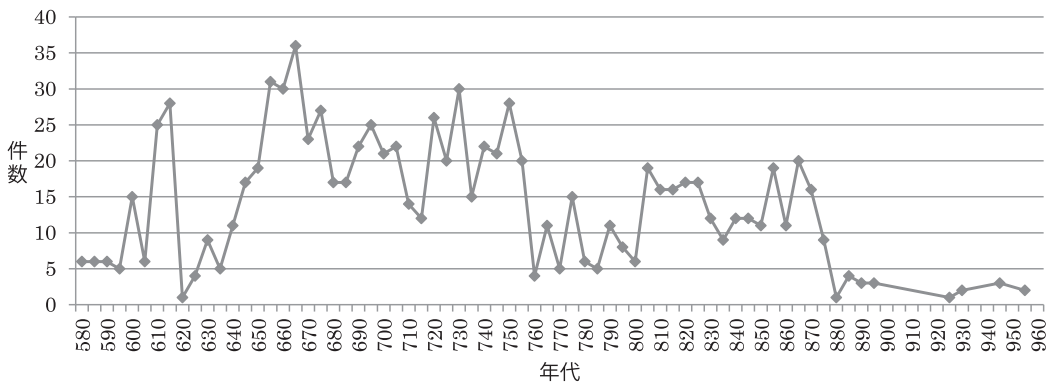
図表 1-16・17 に示したように、墓誌の書体は、隸書・行書も見られるが、楷書が対象とした年代を通じて、最も一般的な書体であり、楷書の件数の変動は墓誌の件数そのものを反映していることが分かる。行書が750年（＝750～754年）に17件と急に件数が増加してい



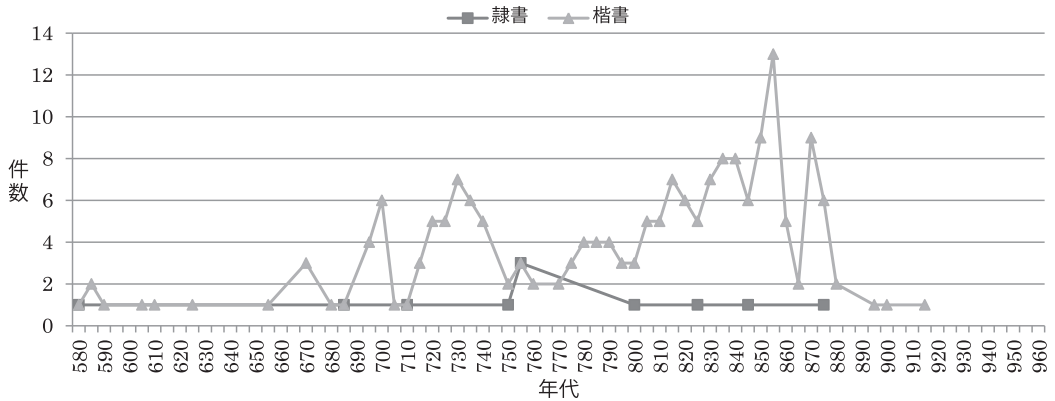
図表 1-16 墓誌の書体 (楷書) [8]



図表 1-17 墓誌の書体 (隸書・行書) [9]



図表 1-18 墓誌蓋の書体 (篆書) [10]



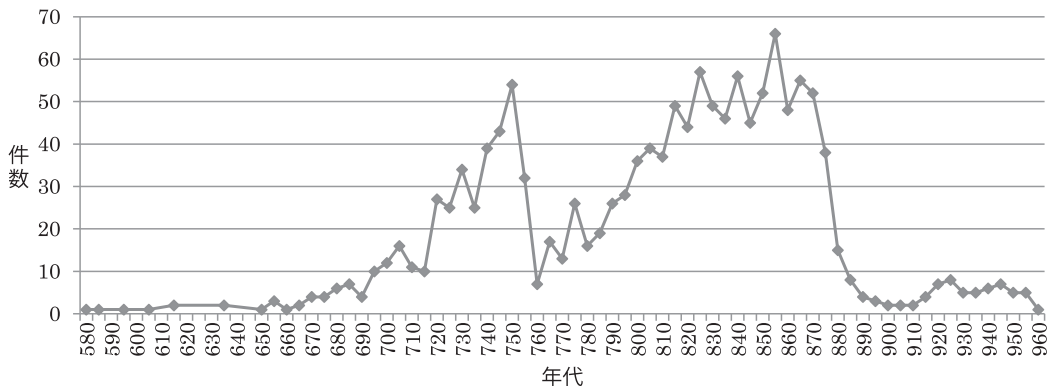
図表 1-19 墓誌蓋の書体（隸書・楷書）^[11]

るが、その原因は不明である。

墓誌蓋の書体は図表 1-18・19 に見るように、篆書が対象とした年代を通じて最も一般的な書体であることが分かる。楷書は、770 年（=770～774 年）以降徐々にその数を増やしている。隸書（図表 1-19）・行書（全 4 件：ここではグラフ化しない）も見られるがその数は少ない。なお、本考察では、墓誌・墓誌蓋ともに行楷書・隸楷書など混合した書式だと判断されているものは分析対象から除いた。

（5）撰者・書者・鐫者

図表 1-20 より、撰者・書者・鐫者の情報は 715 年頃（=715～719 年）から徐々に記されるようになり、墓誌の作成数が減少する 760 年（=760～764 年）に一時減少するが、その後はまた増加することが分かる。この増加の具合は、図表 1-1 の増加よりも急激なもので、この時期に撰者などの情報が墓誌に記されるようになることを示している。880 年



図表 1-20 撰者・書者・鐫者の情報がある墓誌件数^[12]

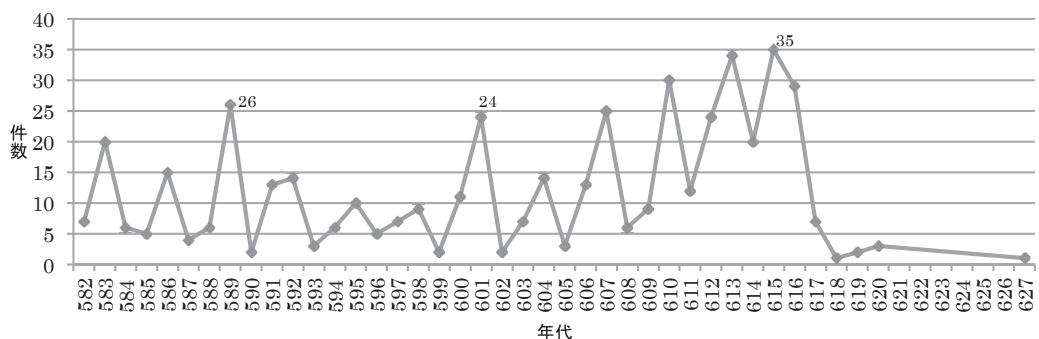
(=880～884年)になると再度減少するが、これも墓誌の作成数の減少の影響を受けていると見られる。

2. 『隋代墓誌銘彙考』

『隋代墓誌銘彙考』(全6冊)から得られた墓誌のサンプル数は全部で472件、墓誌蓋のサンプル数は全部で206件である。上に見た『隋唐五代墓誌彙編』と同様に『隋代墓誌銘彙考』は墓誌以外にも墓に関する石刻を掲載しているが、本研究では「墓磚」を分析の対象から除いた。なお、以下の『隋代墓誌銘彙考』に関するデータは、1年区切りで表示する。『隋代墓誌銘彙考』が収録する墓誌の年代の上限は582年、下限は627年であった。

(1) 墓誌の年代

『隋代墓誌銘彙考』のデータでも同様に、墓誌の件数の変化を歴史事項に照らしてみたい(図表2-1)。本データは、隋の楊堅が北周を滅ぼして隋を建国(581年)した後のものであるが、隋が陳を滅ぼして中国を統一した589年に一度目のピークを迎え、文帝の末期である601年にも二度目のピークが見える。その後の2代皇帝の煬帝の位に就いてからは(604年～)は、増減を繰り返しながらも徐々に件数は増加した。これは上述の『隋唐五代墓誌彙編』で610年(=610～614年)に墓誌の件数が多くなっていた傾向と一致する。隋末唐初の混乱前夜の615年には隋代で最も多く作成された。隋末唐初の混乱期に減少する傾向も、『隋唐五代墓誌彙編』の分析結果と同じである。

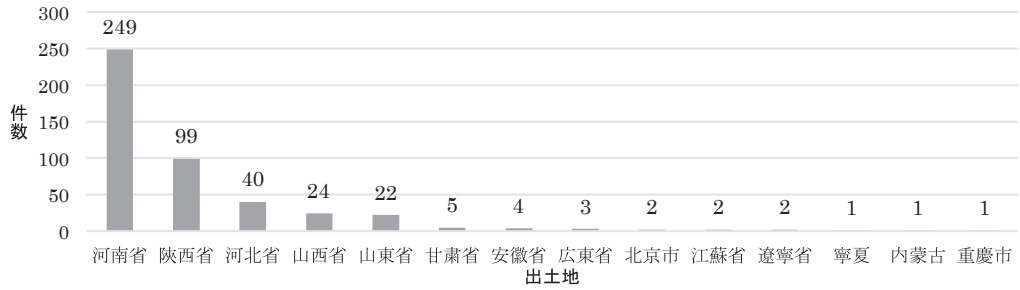


図表2-1 年代ごとの墓誌の件数^[13]

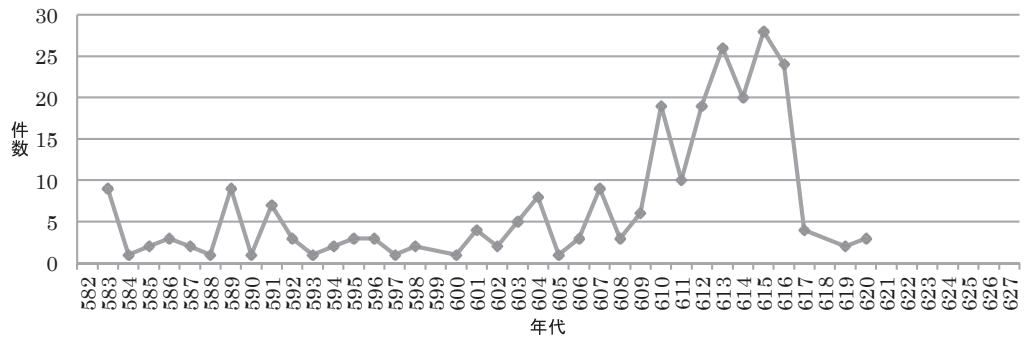
(2) 墓誌の出土地

図表2-2から、『隋唐五代墓誌彙編』での分析結果と同様に、河南省での出土数が最も多いことが分かる。図表2-3を併せて見れば、特に602年頃以降に見られる墓誌の全体の件

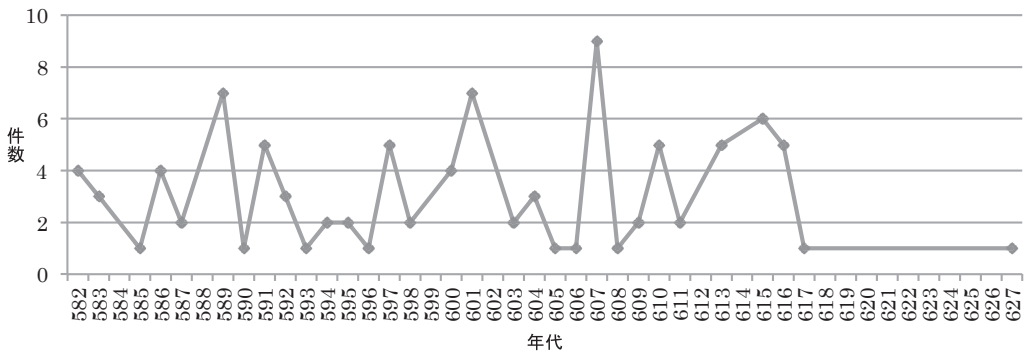
隋唐期における墓誌史料の研究基盤情報の統計分析（福島）



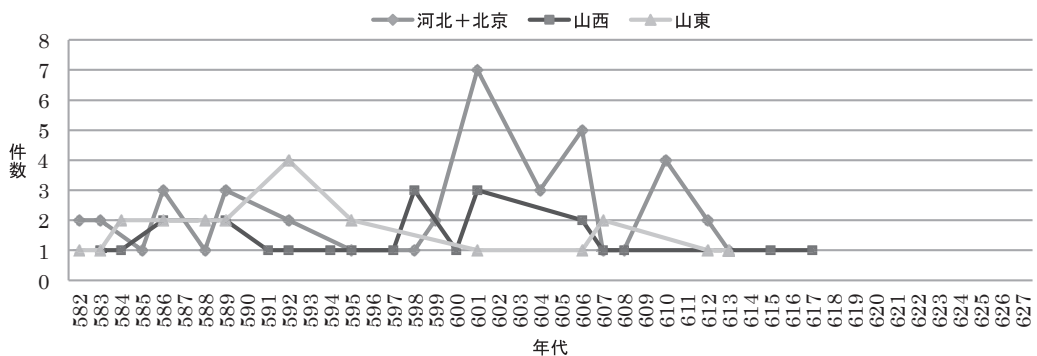
図表 2-2 出土地ごとの件数



図表 2-3 河南省の件数^[14]



図表 2-4 陝西省の件数^[15]



図表 2-5 その他上位 3 省の件数^[16]

数の増加は、河南省の件数が増加したことによるとみられる。上述したように、この増加時期は、煬帝が帝位にあった時期である。煬帝は604年に即位し、翌年に洛陽（現在の河南省洛陽市）に遷都しており、これが河南省で墓誌が増加する原因であると推測される。また、**図表 2-4**を見れば、602年以前における墓誌の全体の件数の激しい増減は、陝西省（文帝期の都が置かれた西安）の件数が影響していると言えよう。

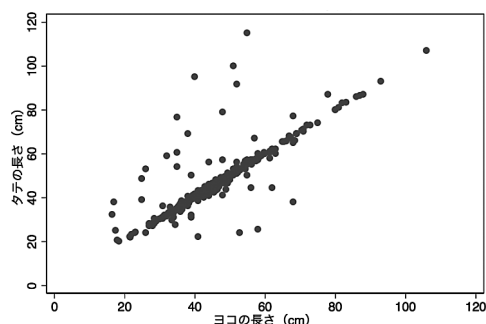
(3) 墓誌・墓誌蓋のサイズ

図表 2-6の平均値・最頻値を見れば、墓誌と墓誌蓋とのタテ・ヨコはそれぞれほぼ同値であることが分かる。墓誌・墓誌蓋の大きさについては、墓誌蓋の値が墓誌に比べて若干大きいものの、その差は3cm程度であってほぼ揃っていると言えよう。また、墓誌の最頻値を見れば、『隋唐五代墓誌彙編』（**図表 1-6**）の最頻値よりも3cm大きいことが分かる。

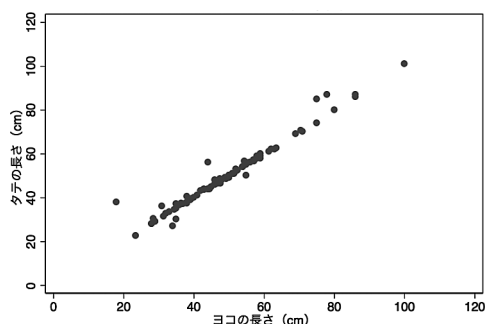
図表 2-7と**図表 2-8**から、墓誌と墓誌蓋のタテとヨコの長さには相関関係にあることが分かり、ほぼ正方形だと言える。ところが、各省ごとの散布状況を見てみると、河南省（**図表 2-9**）・陝西省（**図表 2-11**）は点がほぼ直線上に並ぶのに対して、特に**図表 2-13**はバラつきがあり、『隋唐五代墓誌彙編』場合（**図表 1-13**）と比較しても散っている。ここから、河南省・陝西省で作成される墓誌は、隋代から正方形に画一されていたが、その他の地域では、タテやヨコに長い長方形の墓誌が作成されていたことが分かる。

図表 2-6 墓誌・墓誌蓋のサイズ

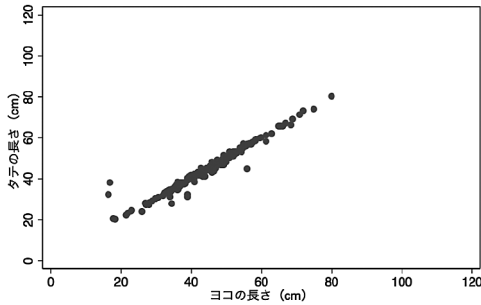
	標本数	平均値	最大値	最小値	標準偏差	最頻値
墓誌 タテの長さ (cm)	446	47.22449	115	20	13.17881	48
墓誌 ヨコの長さ (cm)	444	46.39655	106	16.5	11.99146	48
蓋 タテの長さ (cm)	97	49.79368	101	22.5	14.48883	44, 51, 56
蓋 ヨコの長さ (cm)	96	49.25789	100	18	14.32346	46



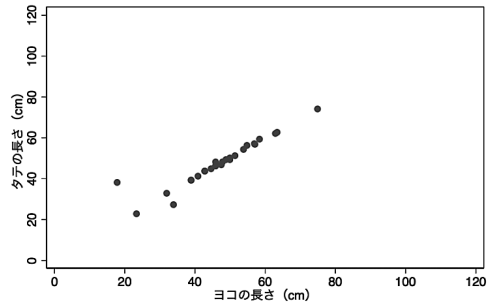
図表 2-7 墓誌のサイズの散布図



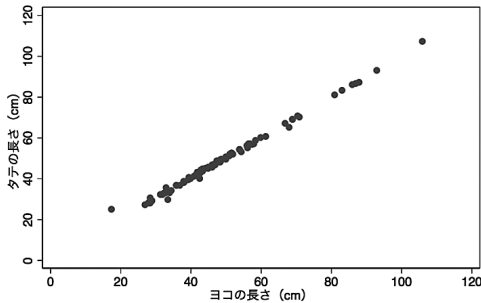
図表 2-8 蓋のサイズの散布図



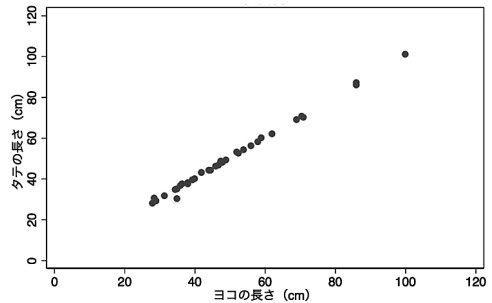
図表 2-9 墓誌のサイズの散布図（河南省）



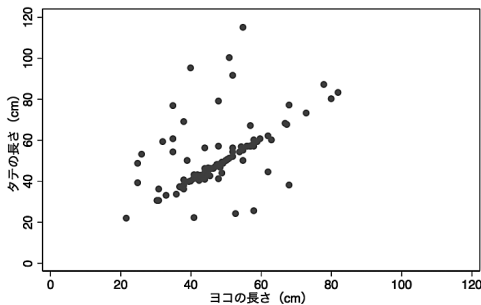
図表 2-10 蓋のサイズの散布図（河南省）



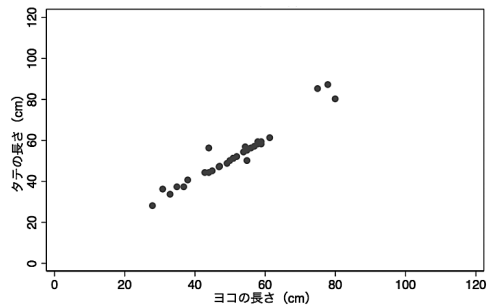
図表 2-11 墓誌のサイズの散布図（陝西省）



図表 2-12 蓋のサイズの散布図（陝西省）



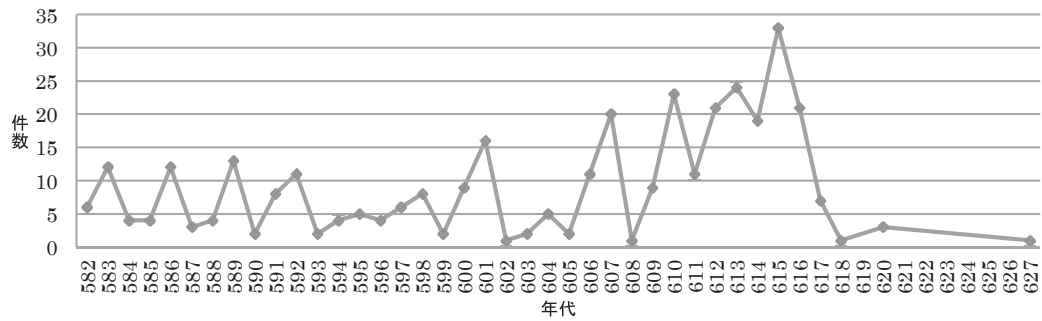
図表 2-13 墓誌のサイズの散布図（その他の省）



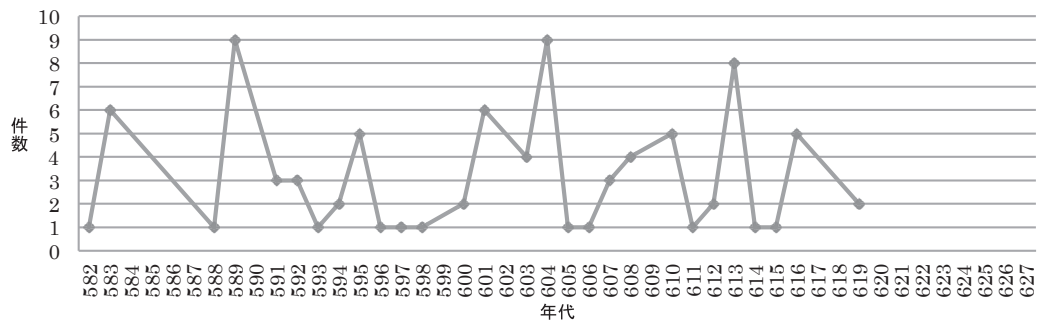
図表 2-14 蓋のサイズの散布図（その他の省）

(4) 書体

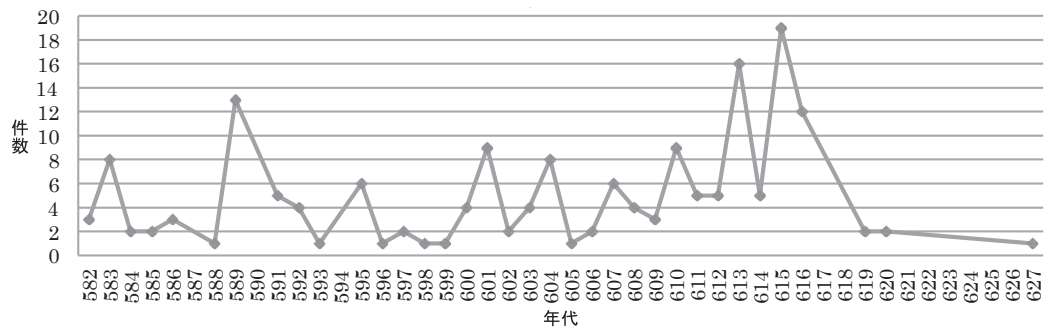
墓誌・墓誌蓋ともに、楷書・隸書・篆書がある（図表 2-15～18）。墓誌の場合はさらに、楷書と隸書、楷書と篆書、隸書と篆書などのように複合しているものも見られた。ただし、墓誌は楷書が、墓誌蓋は篆書がそれぞれ隋代を通じて最多であって、2つのグラフ（図表 2-15・図表 2-17）は墓誌の件数の時系列グラフと非常に似た線を描いている。これは、『隋唐五代墓誌彙編』の分析結果（本稿 1.(4) 参照）と同じである。また、ここでは、墓誌で2番目に多い書体の隸書と墓誌蓋で2番目に多い書体の楷書のグラフを掲載した。件数は多くはないものの、隋代を通じて作成されていることが分かる。



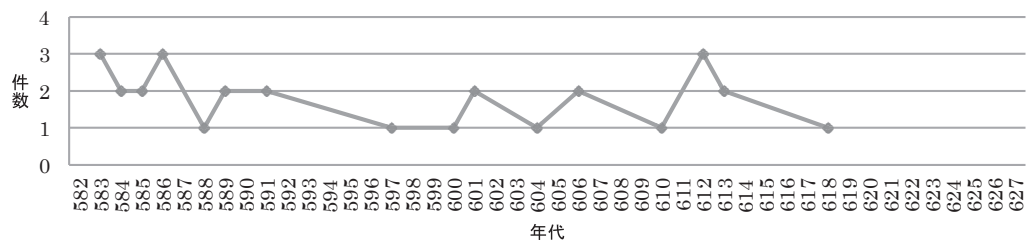
図表 2-15 墓誌の書体 (楷書)^[17]



図表 2-16 墓誌の書体 (隷書)^[18]



図表 2-17 墓誌蓋の書体 (篆書)^[19]



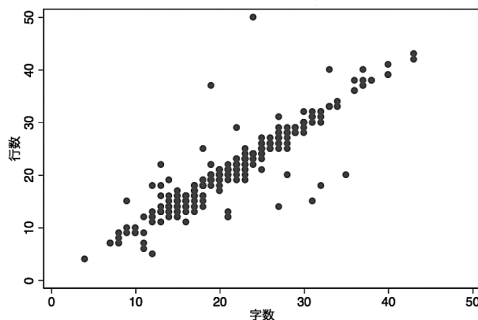
図表 2-18 墓誌蓋の書体 (楷書)^[20]

（5）行数・字数・文字数

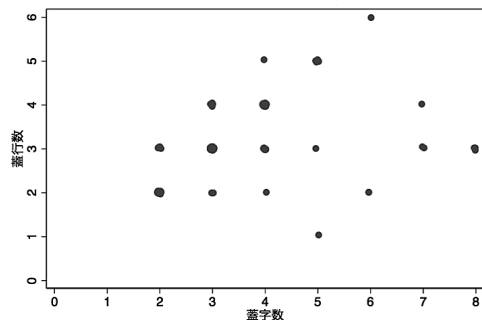
ここで言う「字数」とは、1行あたりに記された文字の数のこととし、「文字数」とは、墓誌に記された文字全部の数、つまり「行数」と「字数」を掛け合わせた値とする。

図表 2-19 から墓誌の行数と字数は、ほぼ同数の相関関係にあることが分かり、墓誌は行数・字数を計算して刻していたことが分かる。また、図表 2-20 の点は、件数の多少が点の大小に反映するようにしたものである。蓋は3行3字が最も多く、2行2字、4行4字、5行5字というように行数・字数が同数となることが好まれたと言えよう。

図表 2-21 の墓誌の文字数の最頻値から、原稿用紙1枚分（20字×20行＝400字）が最も一般的な墓誌の文字数であることが分かる。



図表 2-19 墓誌 行数・字数の散布図



図表 2-20 墓誌蓋 行数・字数の散布図

図表 2-21 墓誌・墓誌蓋の字数

	標本数	平均値	最大値	最小値	標準偏差	最頻値
墓誌 文字数	438	487.0571	1849	16	297.5299	400
蓋 文字数	214	10.83645	36	4	5.615737	9

おわりに

以上の要点をまとめれば次のようになる。

『隋唐五代墓誌彙編』・『隋代墓誌銘彙考』の分析から、共通して言えるのは、①墓誌の件数は国内情勢に大きく左右されること、②出土地は圧倒的に河南省（洛陽）が多いこと、③墓誌の形状は基本的に正方形であること、④書体は墓誌が楷書で墓誌蓋は篆書が多いことである。

この共通点以外で、『隋唐五代墓誌彙編』の分析から判明した特に重要だと思われる点は、①墓誌の件数のピークは、660年（＝660～664年）であること、②墓誌で最も一般的なサイズは45cm四方であること、③最大の墓誌は魏博節度使であった「何弘敬墓誌」（タテ・ヨ

コ 195 cm) であり, 藩鎮体制はその地域での墓誌の件数にも影響を与えたとみられることである。

『隋代墓誌銘彙考』では, ①煬帝が皇帝となって洛陽に遷都(605年)して以降, 隋末の混乱期の前年(615年)まで, 隋代墓誌の件数は徐々に増加してピークを迎えること, ②隋代墓誌の最も一般的なサイズは, 48 cm 四方で唐代より若干大きいこと, ③文字数は, 墓誌が 20 字×20 行=400 字, 墓誌蓋が 3 字×3 行=9 字が最多であることである。

本稿冒頭で述べたように, 今回の分析は, 『隋唐五代墓誌彙編』と『隋代墓誌銘彙考』に限定して行ったものである。以上で述べた分析結果は, 隋・唐・五代期の墓誌を研究する上で墓誌史料の基盤となる情報としてある程度は有効なものであると考えられるが, この2つの拓本集成が出版された後も続々と墓誌が公開・報告されていて, それらを加えると数値に変化が出るとみられ, この点に注意が必要である。現在, 特に隋唐時代を研究する上で, 墓誌史料は必要不可欠な史料である。それゆえ, 墓誌の史料としての基礎的性格の解明は重要であって, 今後この分野の研究が様々な方法でさらに進展することを期待したい。

注

- [1] 墓表(全 150 件)は, すべて新疆出土であった。
- [2] 本稿で用いる墓誌の「年代」は, 基本的に墓誌に記される「埋葬年」を墓誌の作成年代と考えて採用した。ただし, 墓誌に「埋葬年」の記載がなく「死亡年」の記載がある場合は, 「死亡年」を「年代」として使用した。
- [3] 下限の 960 年(= 960~964 年)に属す墓誌は, 「石暎墓誌」(北漢天会 8 年(964): 北京附遼寧 3 卷 p. 175) だけであった。この墓誌は, 干支が記されているだけのため, 年号を確定することができず, 開元 12 年(724)のものだとする説もある。
- [4] 本稿の折れ線グラフでは, 数値(件数)が 0 の場合, その値をグラフ上で示すと複雑となり墓誌全体の傾向の把握を難しくするため, 0 は示さず, 次に現れる数値まで線を繋げた。なお, 0 件であった年代を本注釈で記すこととする。図表 1-1 において, 0 件の年代は無かった。
- [5] 0 件は, 885・890・960 年。
- [6] 0 件は, 585・885・900~955 年。
- [7] 0 件は, 以下のとおり。
 河北・北京は, 615・620・630~640・650・695・710・725・745・765・890・900・905・925~935・950・960 年。
 江蘇は, 580~635・645~715・725~735・745・770・890・900・905・915・925・930・960 年。
 山西は, 580・590・610・620~640・650・800・840・865・885~895・910・920・955・960 年。
- [8] 0 件は, 960 年。
- [9] 0 件は以下のとおり。
 隸書は, 620・630~665・675・680・695・735・760・765・785・795~810・830~850・865~875・885~960 年。
 行書は, 580~630・640~650・660~680・705~715・880~890・900~920・930・935・945 年。
- [10] 0 件は, 900~920・935・940・950・960 年。

[11] 0件は以下のとおり。

楷書は、595・600・615・620・630～650・660・665・675・690・745・765・885・890・905・910・920～960年。

隸書は、585～680・690～705・715～745・760～795・805～820・830～840・850～870・880～960年。

[12] 0件は、590・600・610・620～630・640・645年。

[13] 0件は、621～626年。

[14] 0件は、582・599・618・621～627年。

[15] 0件は、584・588・599・602・612・614・618～626年。

[16] 0件は、以下のとおり。

河北・北京は、584・587・590・591・593・594・596・597・600・602・603・605・609・611・614～627年。

山西は、582・585・587・588・590・593・596・599・602～605・609～614・616・618～627年。

山東は、585・590・591・593・594・596～600・602～605・608～611・614～627年。

[17] 0件は、619・621～626年。

[18] 0件は、584～587・590・599・602・609・617・618・620～627年。

[19] 0件は、587・590・594・617・618・621～626年。

[20] 0件は、582・587・590・592～596・598・599・602・603・605・607～609・611・614～617・619～627年。

（ふくしま めぐみ 日本学術振興会特別研究員）